

# よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



7

よろこびの知らせ  
第7集

目 次

|                 |    |
|-----------------|----|
| 神にささげられた子 ..... | 1  |
| ルカ 2:21-24      |    |
| 御言葉を学ぶイエス ..... | 10 |
| ルカ 2:41-52      |    |
| わたしの愛する子 .....  | 19 |
| マタイ 3:13-17     |    |
| イエスの受けた誘惑 ..... | 28 |
| マタイ 4:1-11      |    |

ここに収められたのは、2020年3~4月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖書箇所は“Gospel Project”に沿って選ばれており、聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

# 神にささげられた子

ルカ 2:21-24

2:21 八日が満ちて幼子に割礼を施す日となり、幼子はイエスという名で呼ばれることになった。胎内に宿る前に御使いがつけた名である。

2:22 さて、モーセの律法による彼らのきよめの期間が満ちたとき、両親は幼子を主にささげるために、エルサレムへ連れて行った。

2:23 —それは、主の律法に「母の胎を開く男子の初子は、すべて、主に聖別された者、と呼ばれなければならない。」と書いてあるとおりであった。——

2:24 また、主の律法に「山ぼと一つがい、または、家ぼとのひな二羽。」と定められたところに従って犠牲をささげるためであった。

## 一、キリストの貧しさ

礼拝の聖書箇所は、Gospel Project というカリキュラムに従っており、今週と来週はイエスがまだ赤ん坊だったときや子どもだったころのエピソードをルカの福音書からとりあげます。レントの期間にこうした箇所を学ぶのは、時期外れのように感じられますが、じつは、イエスの苦難の道は、赤ん坊や子どもだった時から始まっていたのです。

ルカ 2:21 には、イエスが生まれて八日目に割礼を受け、「イエス」と名付けられたことが書かれています。「イエス」という名には「神、救いたもう」という意味があります。この名は天使によってマリヤの夫となるヨセフ

に与えられたものです。マタイ 1:21 に「マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそご自分の民をその罪から救ってくださる方です」とあるように、「イエス」という名には、この赤ん坊がやがて人々の罪を背負って、十字架で死ぬことが予告されていたのです。

ルカ 2:22-24 には、マリヤとヨセフが、生後 40 日目のイエスを神殿に連れていき、犠牲を捧げたことが書かれています。22 節に「さて、モーセの律法による彼らのきよめの期間が満ちたとき、両親は幼子を主にささげるために、エルサレムへ連れて行った」とあるように、イエスの最初の宮詣では、ふたつの意味がありました。ひとつは出産後の女性のきよめのため、もうひとつは、長子を神に捧げるためでした。

きよめのための規定はレビ記 12:6-8 にあり、そこには「一歳の子羊一匹と、罪のきよめのささげ物として家鳩のひなか山鳩を一羽」と定められています。しかし、貧しい人のためには、子羊の捧げものが免除されました。「もし彼女に羊を買う余裕がなければ、二羽の山鳩か、二羽の家鳩のひなを取り、一羽は全焼のささげ物、もう一羽は罪のきよめのささげ物とする」とある通りです。

ルカ 2:24 には、「また、主の律法に『山ぼと一つがい、または、家ぼとのひな二羽』と定められたところに従って犠牲をささげるためであった」とあり、マリヤが捧げたのは「山ぼと一つがい」か「家ぼとのひな二羽」のど

ちらかだったことが分かります。ほんらいは子羊を捧げなければならぬのですが、マリヤには、子羊を買う余裕がなかったので、子羊のかわりに鳩のひなを捧げたのです。このことは、イエスが貧しい家庭に生まれ、貧しくお育ちになったことを教えています。

ピリピ 2:6-8 にこうあります。「キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」神であるお方が「人」となり、主であるお方が「しもべ」となられたのです。神の御子が、「ご自分を空しく」し、「自らを低くし」たのです。コリント第二 8:9 は、このことを、「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました」と言い替えています。

「主は…貧しくなられた。」それは、たんに経済的に「貧しい」という以上のものです。イエスは天の栄光の富すべてを投げうって、この地上に来られたのですからたとえ、イエスが王宮に生まれて、何不自由ない生活をしたとしても、天から見ればそれも、貧しく、貧弱なものに過ぎないでしょう。そうであるのに、イエスは人間の社会の中でも、貧しい人々のひとりとなってくださいました。当時、ユダヤの国は、国とはいっても名ばかりで、独立を失い、ローマの属国になっていました。税金

や貢物をローマに吸い上げられ、人々は貧しい生活を強いられていました。イエスは、当時の世界でいちばん弱く、貧しい国の、貧しい階層に生まれ、育ちました。それは、私たちが「キリストの貧しさによって富む者となるため」でした。コリント第二 8:9 はこう言っています。

「あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」キリストはご自分を貧しくして、私たちに天のものに富む者としてくださったのです。

終戦直後、日本で「蟻の町のマリア」と呼ばれた人がいました。北原怜子といって、1929年生まれの人です。彼女はクリスチャンになってから、隅田川の言問橋（ことといばし）の周辺にあった「蟻の町」で奉仕を始めました。「蟻の町」というのは、廃品回収で生計を立てていた人たちが集まって生活していた貧困地域でした。

「蟻の町」は、ならず者や泥棒ばかりがいるところだという、いわれのない非難を受けていました。そこにいた子どもたちも十分な教育を受けられないでいました。北原さんは「蟻の町」に通い、子どもたちの教育のために力を尽くしました。彼女は大学教授の娘で、戦後とはいえ、他の人々に比べ豊かな生活をしていました。しかし彼女は、そこで奉仕をしているうちに、恵まれているものの中から、その一部を削って、人々に施すだけでは本

当の奉仕ではない。自分も、「蟻の町」の人々と同じように廃品回収をして生活すべきだと考えるようになりました。

恵まれた生活は神が与えてくださる祝福で、感謝して受け取るべきものです。しかし、それを独り占めすることは、貪欲であり、神に喜ばれることではありません。神は、自分が受けた祝福を、力に応じて、進んで、他の人と分かち合うことを喜んでくださいます。聖書はそのことを「(自分で)決めたとおりにしなさい」(コリント第二9:7)と教えています。ですから、すべての人に、自分の生活を捨てて、貧しい人々と生活を共にすることが求められているわけではありません。けれども北原さんは、彼女の方法で神と人にとに仕える道を選びました。神の召しはそれぞれに違いますから、皆が同じ道歩くわけではありません。しかし、どのような道を歩こうとも、「キリストの貧しさ」にあずかろうとした人々の生き方の中にある、「キリストの心」を、私たちも持っていたいと思います。そして、その心を持って、自分のできることに励みたいと思います。

北原さんは、その後、結核にかかり、療養生活のため「蟻の町」を離れましたが、死期を悟ると、最期を「蟻の町」で過ごしたいと願い、再び「蟻の町」に住み、1958年1月23日、28歳の若さで世を去りました。彼女が亡くなってから、東京都は「蟻の町」に退去命令を出すのですが、北原さんが書き遺した『アリの町のこどもた

ち』を読んだ東京都の職員が、「私は、東京都の役人である前に、人間でありたい」と言って、「蟻の町」の人々に代替地を提供するため尽力したということが伝えられています。「キリストの貧しさ」に生きた人の証しが、信仰を持たない人さえ動かしたとしたら、キリストご自身が天の栄光を捨てて貧しくなられたことが、信仰を持つ人を動かさないわけはありません。「あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っていますすなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」（コリント第二 8:9）信仰によって富むものとされていることを感謝しましょう。そして、与えられているその恵みで、人々に仕えましょう。

## 二、神の子羊

さて、イエスの生後 40 日目の宮詣では、出産後の女性のきよめの他に、もう一つの大切な目的がありましたそれは、マリヤにとっての、はじめての子、「初子」であるイエスを神に捧げるためでした。そのことは、イスラエルがエジプトから脱出した時に、主なる神がモーセを通してお命じになったもので、出エジプト記 13:1-15 に定められています。それを要約すると、次のようになります。

「エジプトの王がイスラエルを奴隷から解放しなかったため、主は、エジプトに十の災いを下された。その最



期の災いは、エジプト中の初子という初子が、王の跡継ぎから家畜の初子に至るまで殺されるというものだったしかし、イスラエルの人々は、主の言葉に従って家の入り口に、子羊の血を塗ったので、災いはその家を過ぎ越し、その家の初子は生かされた。そのとき主は、すべての初子を、人間であっても、家畜であっても、ご自分のものとされた。それで、イスラエルの人々は、最初に生まれた者を神に捧げるのである。」

最初に生まれた子どもを神に捧げるといっても、その子を実際に犠牲にするわけではありません。身代わりに子羊を捧げ、贖ったのです。それは、イスラエルが「過越」によって贖われたものであることを覚えるためでした。イエスの場合は、身代わりに「鳩のひな」が捧げられました。このとき、子羊が捧げられなかったことの中には、神の深いみこころがあったように思います。それは、イエスご自身が「子羊」であって、贖いの子羊がそこにあったからです。のちに、バプテスマのヨハネは、イエスを指して、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ 1:29）と言いました。「神の子羊」であるイエスは、イスラエルに生まれた長子だけでなく、すべての人を贖うために、その身代わりとなり、十字架の上で、ご自分を捧げられました。イスラエルがエジプトで奴隷だったように、私たちも罪の中において、その奴隷となっていました。イエスは、そんな私たちを、罪の奴隷から贖う、神の子羊となってくださったのです。そのことによって、イスラエルの人々を救った「過越」を、すべ

ての人のために実現してくださったのです。「過越」はギリシャ語で「パスカ」と言いますが、教会は、イエスの受難を「パスカ」と呼んできました。イエス・キリストは、新約時代の「過越の子羊」（コリント第一 5:7）であり、キリストを信じる者は、神の子羊であるキリストによって贖われ、神のものとしてされているのです。

このように、イエスは、旧約に預言されていた救いを成就されたのですが、それは、イエスがまだ赤ん坊だったときから始まっていました。赤ん坊のイエスは、ご自分では何一つ行動を起こすことはできませんでしたが、マリヤに抱かれながらも、そのことをなされたのです。ルカ 2:39 に「さて、彼らは主の律法による定めをすべて果たしたので、ガリラヤの自分たちの町ナザレに帰った」とあります。ヨセフもマリヤも敬虔な人々で、律法が定めたことを忠実に行いました。ふたりは意識してはいませんでした。彼らが律法に従って行ったひとつひとつのことが、その律法が成就することへとつながったのです。私たちの救いは十字架と復活によって成就しますが、そこに至るイエスの生涯のひとつま、ひとつまもまた、私たちの救いにつながるものだったのです。

私たちは、これから、日曜日の礼拝で、イエスのご生涯をたどっていきます。その中に、私たちの救いが成就していく様子をしっかりと見ていきたいと思えます。また、その救いを受けた者として、どのようにイエスに倣っていくことができるのかも学んでいきたいと思えます。聖霊の助けと導きを求めながら、そのことをしてい

きましょう。

(祈り)

イエス・キリストの父なる神さま。あなたは、イエスのご生涯を通して、旧約時代からすでに約束しておられた、私たちの救いを成就してくださいました。私たちが、イエスにある救いの成就をしっかりと学び、あなたが、どんなに、私たちに真実なお方であるかを知り、よりいっそう、あなたに信頼する者となれますよう、導き、助けてください。主イエスのお名前で祈ります。

# 御言葉を学ぶイエス

ルカ 2:41-52

2:41 さて、イエスの両親は、過越の祭りには毎年エルサレムに行った。

2:42 イエスが十二歳になられたときも、両親は祭りの慣習に従って都へ上り、

2:43 祭りの期間を過ごしてから、帰路についたが、少年イエスはエルサレムにとどまっておられた。両親はそれに気づかなかった。

2:44 イエスが一行の中にいるものと思って、一日の道のりを行った。それから、親族や知人の中を捜し回ったが、

2:45 見つからなかったので、イエスを捜しながら、エルサレムまで引き返した。

2:46 そしてようやく三日の後に、イエスが宮で教師たちの真中にすわって、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。

2:47 聞いていた人々はみな、イエスの知恵と答えに驚いていた。

2:48 両親は彼を見て驚き、母は言った。「まあ、あなたはなぜ私たちにこんなことをしたのです。見なさい。父上も私も、心配してあなたを捜し回っていたのです。」

2:49 するとイエスは両親に言われた。「どうしてわたしをお捜しになったのですか。わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。」

2:50 しかし両親には、イエスの話されたことばの意味がわからなかった。

2:51 それからイエスは、いっしょに下って行かれ、ナザレに帰って、両親に仕えられた。母はこれらのことをみな、心に留めておいた。

2:52 イエスはますます知恵が進み、背たけも大きくなり、神と人々に愛された。

## 一、イエスの少年時代

最近、“Young Messiah”という映画を DVD で観まし

た。エジプトに逃れていたときから12歳までのイエスの少年時代を描いたものです。よく出来た映画ですが、少年イエスが祈ると数々の奇蹟が起るという部分は聖書から離れているので、残念でした。

イエスが子どものころから奇蹟を行ったという話は、3~4世紀ごろに書かれた『トマスによるイエスの幼児物語』というものに載っています。それによると、イエスが5歳のときからさまざまな奇蹟を行ったことになっています。ある雨の日イエスは地面に穴を掘り、そこに水を貯めて遊んでいました。その水で泥をこねて12羽の雀を作り、それに命じると雀が羽を広げ、鳴きながら飛んで行ったというのです。人々はこのことに驚き、その話を村中に伝えました。それを聞いた律法学者のこどもが、イエスが掘った穴に柳の枝をつっこんで、イエスが集めた水を流してしまいました。すると、イエスは怒って、その子の体を枯らしてしまったということも書かれています。他にも、イエスが学校に連れて行かれたが、逆に教師をたしなめ教えた。病気を直したり、死人を生き返らせた等といったことが書かれています。どれも、荒唐無稽なストーリーです。

聖書は、少年イエスが奇蹟を行ったとは言っていません。むしろ、他の子どもと少しも変わらず過ごしたと言っています。

イエスは聖霊により、処女マリヤから生まれましたから、その「誕生」、もっと正確に言えば、「受胎」は奇蹟によるものでした。けれども、それ以外は、イエスは

他の赤ん坊と少しも変わりませんでした。母の胎内で9ヶ月養われ、産声をあげ、乳を飲み、おしめを取り替えてもらいました。やがて、寝返りができるようになり、笑ったり、声を出したり、立ったり、ハイハイするようになっていきました。人間としての通常の段階を踏んで成長していきました。お釈迦様のように、生まれてすぐに、東西南北に七歩づつ歩いて、「天上天下唯我独尊」などと言ったわけではありません。御子は、本物の人間になられたのです。ピリピ2:6-7に「キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました」とある通りです。

## 二、神殿でのイエス

きょうの箇所は、イエスの二度目の「宮詣で」のことが書かれています。一度目は、イエスの生後40日目のことでしたが、ここでは、イエスは12歳になっています。「12歳」というのは、ユダヤの子どもにとって意味のある年齢でした。ユダヤでは、13歳が「成人」で、このとき、「バル・ミツバー」（「律法の子」）を呼ばれる儀式を神殿で受けます。それで、イエスは、その準備のためにヨセフ、マリヤと一緒にエルサレムに上りました。

無事に予定を終えて、ヨセフとマリヤは、ナザレからの巡礼団と一緒に帰路につきました。一日の道のりを終え、ヨセフはマリヤに「イエス是一緒か？」と尋ねました。それは、マリヤがヨセフに聞こうとしていたことでした。ヨセフは、イエスがマリヤと一緒にいると思い、マ

リヤもイエスがヨセフと一緒にいると思っていました。巡礼団は足の弱い女性が先に歩き、男性がその後を歩きました。12歳までの子どもは、母親といっしょに女性のグループに入ることもできれば、父親と一緒に男性のグループに入ることもできました。それで、ヨセフもマリヤもイエスが一緒でないことに気付かなかったのです。

ヨセフとマリヤは、エルサレムに引き返し、あちらこちらを捜しましたが、ようやく、神殿でイエスを見つけました。イエスは「教師たちの真中にすわって、話を聞いたり質問したりして」いました（46節）。当時、神殿では律法学者たちが子どもたちを集めて、律法を教えるのが普通のことでした。この時の「イエスの知恵と答」は、大人たちも驚くほどのものでしたが、イエスは決して、大人たちを教えようとはしていません。エルサレムの神殿では、ナザレの会堂では学べない多くのことがあったのでしょう。聖書は、ある意味では、神殿で祭司が執り行う儀式を解説するものですから、少年イエスは、神殿の儀式のひとつひとつを観察しながら、そこで朗読される聖書の言葉や歌われる詩篇の賛美を聞き、その意味を考えることに夢中になっていたのだと思います。

イエスは神の御子だから、何事も、学ぶことなく知ることができたと考える人は、イエスが人となられたという事実を見落としています。イエスは宣教を開始してからは、人間の知恵や力をこえたことをしましたが、それまでの準備の期間は、安息日ごとに朗読される聖書の言

葉を聞いて覚え、その意味を学び、考え、その知恵、知識を成長させていきました。52節に「イエスはますます知恵が進み…」とある通りです。

この箇所、ただひとつ不思議なことは、イエスがマリヤに「どうしてわたしをお捜しになったのですか。わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか」（49節）と言ったことでした。イエスは神殿を「父の家」と呼ぶことによって、ご自分が「神の御子」とあると言ったのですが、両親はこの言葉の意味が分かりませんでした。イエスは成人式を前に「父の家」、エルサレムの神殿で、「神の御子」としての自覚を持ちましたが、それを内に秘めて、何事もなかったかのようにナザレに帰りました。それから、普通の子どものように、いや普通の子ども以上に、両親に仕えて日を過ごしました。51節に「それからイエスは、いっしょに下って行かれ、ナザレに帰って、両親に仕えられた」とある通りです。イエスは少年時代から、神と人にとに仕える「しもべ」として生きたのです。

### 三、キリストが人となった意味

このように、神の御子は、正真正銘の人間となり、徹底して、人として生きられました。それは、聖なる神と罪ある人間との仲立ち、「仲介者」となるためでした。キリストは、人間の側に立ち、人間の代表者として神に向かってくださったのです。テモテ第一 2:5にこう書かれています。「神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエス



です。」テモテ第一でイエス・キリストについて、「人としてのキリスト・イエス」と言われているのは、私たちが救われるためには、キリストが人とならなければならなかったことを言っているのです。

また、私たちの罪が赦されるためには、罪のないものが犠牲となって神に捧げられる必要がありました。旧約時代に、傷のない動物が祭壇で殺され、血を流したように、キリストもまた、私たちの罪の赦しのために、十字架という祭壇の上で、ご自身を犠牲として神に捧げ、その血を流されたのです。テモテ第二 2:6 に「キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました」とある通りです。キリストが人となられたのは、ご自分のからだを捧げるためでした。

キリストは、人としての成長の段階を踏み、罪を除いては、人間が抱えるあらゆる困難、苦しみ、悩み、また、弱さを体験してくださいました。コリント第一 10:13 に「あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません」とありますが、この「人」という言葉はイエスを指しています。私たちが体験する試練でイエスが体験しなかった試練は何ひとつありません。イエスは私たちと同じ人生、いや、私たちよりももっと過酷な人生を生きることによって、私たちの救い主となられたのです。ですから、私たちは、どんな苦しみの中からも、イエス・キリストのお名前を祈るとき、このお方によって助けを得ることができるのです。「あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたが

たがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。」（イザヤ 46:4）この約束の通り、キリストは、赤ん坊のときから晩年に至るまで、私たちの人生を共に歩いてくださり、私たちの救いとなり、助けとなり、守りとなってくくださるのです。

さらに、キリストは、人としての人生を歩まれたことによって、キリストを信じる者のうちに、本来の人間性を回復してくくださるのです。神はアダムとエバを「神のかたち」に創造されました。「神のかたち」は、神が人にお与えになった本来の人間性のことを指しています。人は、神が聖く、正しく、愛に満ちたお方であるように、神を畏れ、正しく生き、神と隣人を愛する者として造られました。人間には他の動物にはない知性、感情、意志が与えられています。

詩篇 8:5 には、このことについて、「あなたは、人を、神よりいくらか劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました」と言っています。けれども、人間は自分自身でそのような者になったということではありません。詩篇が「神よりいくらか劣るもの」と言っているのは、人間を他の被造物と比べてのことです。神と比べるなら、神は永遠不変のお方であり、人間は有限で移りゆく存在です。人間の知恵知識は、神の全知全能に比べれば、いかほどのものでもありません。確かに人間は被造物の冠として造られています。しかし、その人間の素晴らしさは、すべて「神のかたち」から来ています。人

間は自分で存在し、生きている者ではありません。神によって存在させられ、生かされています。神に依存しているのです。聖書の「神のかたち」という言葉や「神よりいくらか劣るものとし」という表現は、そのことを表しています。

聖アウグスティヌスは、「神は人を神にむけてお造りになった。だから、人の心は、神のうちに憩うまで、安らぎを得ることができない」という言葉で言い表しました。人の心の中には、神ご自身でなければ埋めることができない空洞があるのです。人は神から離れては、本当の人であることができないのです。アダム以来、人は罪によって神から離れ、「神のかたち」を失い、本来の人間性を損なってしまいました。新型コロナ・ウィルスが広がり、世界中の人が苦しんでいるときに、それを利用して詐欺を働くような者があり、軍事的、政治的に有利に立とうとするような国や指導者もあります。「自分さえ良ければ…」とたくさんのものを買い占め、それが奪われるのが怖いからと、銃を買い求める。そんなことを見聞きするとき、神から離れた人間の罪深さを思い知らされます。こんな時こそ、私たちに「神のかたち」を回復し、ほんとうの人間性を取り戻すキリストの救いが必要なのです。

キリストが人となられたのは、ご自身が本来の人間性をもって地上で生きてくださることにより、キリストを信じ、キリストに従う者に、人間の本来の姿を教え、本当の意味で人間らしく生きる力と命とを与えるためでし

た。神の御子は、人となり、「イエス」と名付けられ、ナザレの村で両親に仕えました。全知全能のお方でありながら、御言葉を学び続け、知恵と知識に成長し、努力と労苦を惜しまずに歩まれました。このお方を信じ、このお方に従って生きる、幸いな人生を求め、これからも御言葉を学び続けましょう。

(祈り)

イエス・キリストの父なる神さま。あなたは、あなたの御子を、人として地上に送って下さいました。それによって、私たちが、イエスのご生涯の中に、人としての生き方を学び、それを生きる力を得るためです。御言葉を学ぶ私たちを、イエスのくださる命へと導いてください。イエス・キリストのお名前です。

# わたしの愛する子

マタイ 3:13-17

3:13 そのころ、イエスはガリラヤからヨルダン川のヨハネのもとに来られた。彼からバプテスマを受けるためであった。

3:14 しかし、ヨハネはそうさせまいとして言った。「私こそ、あなたからバプテスマを受ける必要があるのに、あなたが私のところにおいでになったのですか。」

3:15 しかし、イエスは答えられた。「今はそうさせてほしい。このようにして正しいことをすべて実現することが、わたしたちにはふさわしいのです。」そこでヨハネは言われたとおりにした。

3:16 イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると見よ、天が開け、神の御霊が鳩のご自分の上にご降って来られるのをご覧になった。

3:17 そして、見よ、天から声があり、こう告げた。「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。」

## 一、ヨハネが授けたバプテスマ

「バプテスマ」は、日本語では「洗礼」と言います。「洗う」という言葉が入っているように、「身を清める」という意味が含まれています。中国から来た言葉に「齋戒沐浴」（さいかいもくよく）というものがあります。宗教儀式に携わるとき、心身を清くすることをいうのですが、水で清めるという儀式は、どの国にもあります。インドではガンジス川で沐浴します。日本の神道にも「禊」（みそぎ）という儀式があります。そのような儀式は、人間が神聖なものに対して罪や穢（けが）れを持っているという自覚から生まれました。人々は、罪や汚れを取り除くことなしに、神聖なものに近づくことが

出来ないということを知っています。聖書は、神が最も聖なるお方であり、人間には罪があり、汚れを持っていて、そのままでは滅びゆくものであると教えていますが（イザヤ 6:1-5）、さまざまな宗教の中にも、同じことが、形を変えて伝えられているのだと思います。

バプテスマのヨハネがヨルダン川で行っていたバプテスマも、罪や汚れからの「きよめ」のためのものでした。ヨハネが行っていたバプテスマは、本来は、異教徒がユダヤ教に改宗するとき、偶像の汚れを洗い落とし、唯一のまことの神への信仰を誓うために行われたものでした。ところが、ヨハネは、アブラハムの子孫であり、すでに神の民とされているユダヤの人々にバプテスマを授けていました。ヨハネはこう言っています。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの先祖はアブラハムだ。』と心の中で言うような考えではいけません。あなたがたに言うのが、神は、この石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことがおできになるのです。」（マタイ 3:7-9）

「アブラハムの子である」という特権や誇りの上にあぐらをかいていたユダヤの人々に、異邦人が主なる神に立ち返る時のように、バプテスマを受けて、神の民として再出発せよと、ヨハネは教えたのです。

大勢の人々が、ヨハネからバプテスマを受けるため、行列を作っていましたが、その中にイエスの姿がありました。ヨハネのバプテスマは罪の悔い改めのバプテスマ

でしたから、罪のないイエスにはそれを受ける必要がありませんでした。なのに、イエスはその行列の中に並んだのです。それは、イエスが私たちと何一つ変わらない人間になり、みずから進んで、「罪人の仲間」（マタイ 11:19）となってくださったことを意味しています。「罪人の仲間」といっても、ほんとうに罪を犯したということではありません。罪に苦しむ人間の葛藤をイエスは知っていてくださるということです。

「世には良き友も」（新聖歌 426）という賛美がありません。

世には良き友も数あれど  
キリストに勝る良き友はなし  
罪人のかしらわれさえも  
『友』と呼び給う愛の深さよ  
ああわがためいのちをも  
捨てましし友は主なる君のみ

「罪人のかしら」というのは、使徒パウロの言葉です。パウロは壮年期に「私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです」（コリント第一 15:9）と言いました。老年期には、「すべての聖徒たちのうちで一番小さな私」（エペソ 3:8）と言い、晩年には、「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた』ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです」（テモテ第一 1:15）と言って、自分を「罪人のかしら」

と呼びました。「使徒の中では最も小さい者」、「すべての聖徒たちのうちで一番小さな私」、そして「罪人のかしら」と、年齢を重ねるにつれて、パウロは、自分をより罪深い者、より小さな者だと言っています。そして、自分の罪深さを知れば知るほど、パウロは、その罪を赦してくださったキリストの恵みの大きさをより一層賛美したのです。

ある人が「キリストが罪人のかしらさえ愛してくださるのなら、普通の罪人はなおのことですね」と言いましたが、私は、そうだろうかと思いました。やはり「罪人のかしら」がキリストの愛をいちばんよく受けているのだと思いました。親鸞上人の言葉に「善人なおもって往生を遂ぐ、いわんや悪人をや」というのがあります。これは、「自分の罪深さをあまり理解せず、自分は善人だと思っている人でさえ、念仏によって極楽往生できるのなら、まして、自分は悪人だということが分かって、ひたすら阿弥陀仏にすがらるなら、確実に極楽往生できる」という意味です。これを「悪人正機（しょうき）」と言いますが、この教えは、パウロが「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」と宣言し、「私はその罪人のかしらです」と言って、自分こそ、キリストの救いを最も必要としている罪人ですと告白していることに通じるものです。

自分の罪深さは、正直に自分に向き合えば、誰もが分かることです。聖書は、私たちの姿を照らし出す鏡のようなものですから、聖書によって、自分を知ることがで



きます。何よりも、罪のないイエスのご生涯をたどり、聖なるお方に触れるとき、自分の罪深さが見えてきます。本物を見つめる時、自分の中にある偽りが分かってきます。そして、私こそ救われなければならない罪人であり、自分が「罪人のかしら」なのだと分かります。そして、そのとき、「罪人の仲間」になってくださったイエスの恵みが分かるようになるのです。

## 二、イエスが受けたバプテスマ

人々は順に、罪を告白しバプテスマを受けて行き、イエスの番になりました。ヨハネは、目の前にイエスを見て、「私こそ、あなたからバプテスマを受ける必要があるのに、あなたが私のところにおいでになったのですか」（14節）と言って驚きました。ヨハネは、こう教えていました。「私は、あなたがたが悔い改めるために、水のバプテスマを授けていますが、私のあとから来られる方は、私よりもさらに力のある方です。私はその方はきものを脱がせてあげる値うちもありません。」（マタイ3:11）今、イエスを目の前にして、このイエスが自分が預言していたキリストであると悟ったのです。それでヨハネはイエスにバプテスマを授けるのをためらったのですが、イエスは、「今はそうさせてほしい。このようにして正しいことをすべて実現することが、わたしたちにはふさわしいのです」（15節）と言って、ヨハネにバプテスマを授けることを承知させました。

イエスがバプテスマを受けて水から上がると、聖霊が鳩のようにイエスに下り、天からの声が、「これは、わ

たしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ」と告げました。

「これは、わたしの愛する子」というのは、詩篇 2:7 の言葉です。父なる神が御子を人々の「王」としてお立てになったことを言っています。「わたしはこれを喜ぶ」は、イザヤ 42:1 の言葉です。こうあります。「見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす。」イザヤ書では、キリストが「しもべ」と呼ばれています。キリストは人々の「王」であるのに、「しもべ」として世に来られ、罪人の救いを成し遂げてくださいました。イザヤ書に「わたしは彼の上にわたしの霊を授け…」とあるように、聖霊が鳩のようにイエスに下りました。イエスのご生涯とその働きは聖霊に満ちたものとなりました。イエスのなされた様々な力あるわざは聖霊によるものでした。

罪のないイエスにとって、バプテスマは、イエスが神の御子であることと、イエスに世を救う使命が与えられていることを明らかにするものでした。

### 三、私たちが受けたバプテスマ

イエスが受けたバプテスマは、私たちが受けるバプテスマに新しい意味を与えました。私たちが受けるバプテスマは、まず第一に、「罪の悔い改め」です。私たちはバプテスマによって罪の悔い改めと信仰を言い表すのです。

第二に、バプテスマは、「罪の赦し」です。バプテスマには、私たちの側の「悔い改め」とともに、神が私た

ちにくださる「罪の赦し」があります。悔い改めて信じる者に「赦し」が与えられるのです。バプテスマは、「子よ。…あなたの罪は赦された」（マタイ 9:2）「わたしもあなたを罪に定めない」（ヨハネ 8:11）とのイエスの言葉そのものです。

第三に、バプテスマは「新しい誕生」です。ヨハネ 1:12 は「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった」と言い、イエスご自身も、「人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です」（ヨハネ 3:5-6）と言われました。「水と御霊によって」の「水」はバプテスマの水です。神はバプテスマのうちに働いてくださる聖霊によって私たちを生まれ変わらせてくださるのです。父なる神は、イエスのバプテスマのとき、イエスを「わたしの愛する子」と呼ばれましたが、私たちのバプテスマの時も、私たちを「わたしの愛する子」と宣言してくださるのです。バプテスマの水は、産湯のようなものだといってよいでしょう。私たちはバプテスマによって神の子どもの誕生を祝うのです。

第四に、バプテスマは、神からの使命です。それは、キリストの恵みを証しするという使命で、バプテスマを受けたすべての人に与えられています。「神からの使命」というと、「重圧」のように感じるかもしれませんが、決してそうではありません。パウロは、かつて教会

を迫害する者であったのに、キリストが彼を使徒として信頼してくださったことを感謝しています。「信頼する」というと、私たちがキリストに信頼することを思いうかべますが、キリストもまた私たちを「信頼」してくださっているのです。私たちがキリストに信頼する以上に、キリストは、私たちを信頼しておられます。私たちに与えられた使命は、その信頼のしるしです。

また、神は、その使命を果たす力を備えてくださっています。それは聖霊です。聖書が、「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう」（使徒 2:38）と言っている通りです。

イエスはそのご生涯を通して、神を「父よ」と呼んで、絶えず神との愛の中に歩まれました。私たちも、私たちを「わたしの愛する子」と呼んでくださる神の声を聞き、聖霊によって、神を「アバ、父よ」（ローマ 8:15、ガラテヤ 4:6）と呼び、神の愛の中を歩み続けましょう。イエスのご生涯の中に表され、貫かれている神の愛を深く想いみて過ごしたいと思います。

### （祈り）

イエス・キリストの父なる神さま。あなたは、イエスを信じる者の父となり、信じる者を「わたしの愛する子」と呼んでくださいます。罪赦され、あなたの子もとされ、あなたの愛を確信することができるため、ひとりひとりをバプテスマへと導いてください。また、すで

にバプテスマを受けた者たちが、常にバプテスマの意味をふりかえり、あなたの子とされていることを確信して、日々を歩むことができるよう導いてください。主イエスのお名前で祈ります。

## イエスの受けた誘惑

マタイ 4:1-11

4:1 さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。

4:2 そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。

4:3 すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」

4:4 イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある。」

4:5 すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、

4:6 言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。』と書いてありますから。」

4:7 イエスは言われた。「『あなたの神である主を試みてはならない。』とも書いてある。」

4:8 今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、

4:9 言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」

4:10 イエスは言われた。「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある。」

4:11 すると悪魔はイエスを離れて行き、見よ、御使いたちが近づいて来て仕えた。

イエスはヨハネからバプテスマを受けたのち、荒野で四十日の間断食をし、悪魔の誘惑を受けました。荒野の誘惑については、マタイ、マルコ、ルカのそれぞれが記しています。マタイは「イエスは…御霊に導かれて荒野に上って行かれた」（マタイ 4:1）、マルコは「御霊はイエスを荒野

に追いやられた」（マルコ 1:12）と書き、ルカも「御霊に導かれて荒野におり…」（ルカ 4:1）と言っています。イエスの「荒野の試み」では、聖霊が主導権をとっておられ、そこには父なる神のみこころがあり、イエスはそれに従いました。では、その背後には、どのような、神のみこころがあったのでしょうか。

## 一、聖書の成就

イエスが荒野で試みに会われたのは、第一に、旧約を成就するためでした。マタイの福音書には「このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった」（マタイ 1:22）といった言葉が12回出てきます。マタイは、旧約聖書に親しんできたユダヤの人々に、イエスこそ、聖書が預言し、イスラエルの歴史の中に予告されていた救い主であると言っているのです。イエスは、イスラエルの歴史を、ご自分の生涯で繰り返すことによって、聖書を成就したのです。

イスラエルは、エジプトで奴隷でしたが、神の力あるわざによって解放され、エジプトを脱出し、その後、荒野に向かいました。イスラエルが荒野に向かったのは、エジプト人の追撃や他民族との衝突を避けるためだったのですが、もっと大事なことは、何もない荒野で、目に見えるものではなく、目には見えなくても、常に共にいてくださる、主なる神に信頼することを学ぶためでした。神は、荒野の旅の間、水も食べ物も、必要なものはすべて与えてくださったのに、人々は、絶えず不平不満を口にし、ことごとく神に逆らいました。そのためイスラエルは、約束の地

に入るまで一世代、40年もの間、荒野にとどまらなければなりませんでした。

イスラエルがエジプトに寄留したように、幼な子イエスもまた、ヘロデ大王の殺害の手を逃れて、エジプトで時を過ごしました。ヨセフはヘロデ大王が死んだことを聞いてエジプトからユダヤに戻り、より安全なガリラヤに行って住みました。新約聖書は、このことについてこう言っています。「これは、主が預言者を通して、『わたしはエジプトから、わたしの子呼び出した』と言われた事が成就するためであった。」（マタイ 2:15）イエスも、イスラエルと同じように「出エジプト」を体験したのです。

イエスは、出エジプトに続く、荒野の旅も体験しました。それが、「荒野の四十日」でした。その「四十日」は、イスラエルの「荒野の四十年」の繰り返しでした。イエスは神の民が受けたのと同じ試みを受けたのです。イエスは人が体験するあらゆる試み、試練を受けてくださったのです。けれども、イスラエルとイエスとは違いました。イスラエルは荒野の四十年、神に逆らい続けましたが、イエスはすべての試練に打ち勝ち、誘惑のすべてを退けました。イエスは、みこころに逆らった神の民に代わって、父なる神のみこころを成就してくださったのです。旧約時代の神の民の罪を贖い、失敗を償ってくださったのです。

これは、イスラエルの「荒野の四十年」のように、喜びや希望を失くして不平不満のうちに時を過ごす、不信仰という「荒野」を通ることもある私たちにとって大きな救いです。イエスは、みこころに逆らってきた私たちの罪をご



自分の身に引き受け、みこころに従い通されたご自分の義を私たちに与え、信じる者の罪を赦し、その失敗を覆ってくださるのです。イエスの「荒野の四十日」は、父なる神のみこころをなすとげ、聖書を成就し、救いを備える「四十日」だったのです。

## 二、神の御子

第二に、「荒野の四十日」は、イエスが神の御子、私たちの救い主であることを示すものでした。

さまざまな製品は、それを販売する前に、検査を受けます。安全性や耐久性を確かめるために、高いところから落としたり、大きな力をかけたりします。そして、それでも大丈夫だったら、はじめてマーケットに出るのです。それと同じように、イエスも、おおよけの宣教をはじめの前に、試みを通られました。そして、それを通ることによって、イエスこそ、まことの神の御子、救い主であることが、はっきりと示されたのです。

イエスへの試みは「あなたが神の子なら…」という言葉で始まっています。第一の誘惑では「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい」（3節）、第二の誘惑では「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい」（6節）とされています。第三の誘惑には「あなたが神の子なら」という言葉はありませんが、イエスにすべての国々を支配するように言っていますので、イエスが、世を治める神の御子であることが前提となっています。

こうした試みは、人間的な基準からすれば、誘惑とい

うよりは、賢いアドバイスのように聞こえなくもありません。つまり、イエスが超自然の力を持っているのなら、自分の空腹をいやし、人々の空腹を満たすために、それを使うのは、当然のことだというわけです。今日、世界の四分の三の人々には十分な食べ物が与えられていないと言われますが、古代の世界では食べ物にも事欠く人はもっと多かったです。人々を飢えから救えば、世の中は平和になる。神の子なら、その力をそのために使うべきだということです。

また、神殿の頂きから飛び降り、天使に守られて地上に降り立つというのは、自分が「神の子」であることを示すのに、もってこいのパフォーマンスです。人々は、難しい説教よりも、目に見えるものを求めています。ですから、大勢の人々の前でそうしたことをやって見せ、自分をアピールしなさいということです。

さらに、サタンは、イエスにこう提案しました。「わたしはこの世を握っている。わたしと手を組んで、この世を支配したらどうか。」この世の王と同じように、善悪を混ぜ合わせなければ、世界を治めることはできないと言って、サタンはイエスを説き伏せようとしたのです。

確かにイエスは「神の子」です。しかし、それは、超能力を持った「スーパーマン」であるという意味ではありません。バプテスマの時、父なる神が「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ」（マタイ 3:17）と言われたように、イエスは正真正銘の神のひとり子です

が、同時に、神のみこころを、神の定めた方法で成し遂げる、神のしもべです。イザヤ 42:1-3 にこうあります。

「見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす。彼は叫ばず、声をあげず、ちまたにその声を聞かせない。彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす」とあるように、イエスは、人々が「神の子ならこうするだろう。こうすべきだ」というようにはなさいませんでした。物質的なものを与えれば、華々しい活動によって人目を引けば、人々はイエスに従ったかもしれませぬ。しかし、イエスは人をほんとうに生かすものが神の言葉であることを知っていましたから、人々に神の言葉を与え、最後にはご自身さえも与えるという「十字架の道」を歩みました。イエスは、この世の王になろうとはしませんでした。「わたしの国はこの世のものではありません」（ヨハネ 18:36）と言われたように、イエスは神の国の王であり、私たちが神の国に導き入れてくださるのです。その国を「この世の君」（エペソ 2:2）と呼ばれるサタンから受けるものではありません。御国は父なる神から受けとるのです（詩篇 2:8）。

イエスはサタンの誘惑を退けることによって、ご自分が、まことの神の子、私たちの救い主であることを明らかにされました。私たちは、イエスこそが、信じ、従うべきお方であることを知るのです。

### 三、誘惑に勝つ方法

第三に、イエスは、私たちに誘惑に勝つ方法を教えてくださいました。

イエスはどのようにして誘惑を退けたのでしょうか。それは、この箇所に戻り出てくる言葉によって分かります。第一の誘惑、「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい」に対して、イエスは「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある」（4節）と答えています。第二の誘惑、「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい」には、「『あなたの神である主を試みてはならない。』とも書いてある」（7節）と言いました。そして、第三の誘惑、「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう」に対しても、「『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある」（10節）と答えています。どの場合も、聖書の言葉を引用して、「…と書いてある」と言って、誘惑を退けています。

イエスは神の御子なのですから、ご自分の言葉で、誘惑を退けることができたのです。なのに、「…と書いてある」と言って聖書の言葉を引用したのは、聖書がどんなに力ある神の言葉であるか、イエスがどれほど神の言葉に信頼なされたかを示しています。そして、それとともに、私たちに、神の言葉を用いて、誘惑に勝つようにと、教えているのです。

誘惑に対して自分の言葉で答えようとする時、そこに

迷いや言い訳、妥協が生まれます。頼りにならない自分の意見や考えではなく、聖書にはっきりと書かれていることに従うこと、それが誘惑を退ける一番良い方法です。そのためには、日々、聖書に親しみ、大切な聖句は、何度も口で唱えて覚えるようにするといいでしょう。

今、「大切な聖句」と言いましたが、それは、聖書に大切でない言葉があるという意味ではありません。聖書の全体が神の言葉であって、どれも「大切」なのですが、その中でも、中心的な言葉や他の言葉を要約しているような言葉というものがあります。また、時代を通して、多くの人々を励まし、支えてきた言葉もあります。まずは、そういった言葉から覚えていくとよいでしょう。そして、どの聖句が中心的なものかを知るにはやはり、聖書を学ぶ必要があります。

イエスが最初の誘惑に「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある」と言って答えると、第二の誘惑では、サタンも「『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。』と書いてありますから」と言って、聖書を引用しました。聖書には様々な言葉がありますから、文脈を無視して勝手に引用して使われることもあります。この場合がそうです。その引用が正しいかどうかは、聖書を学んでいなければ分かりません。イエスは、「あなたの神である主を試みてはならない」という言葉で、聖

書の勝手な引用を退けています。

この世には誘惑が満ちています。私たちを神から引き離し、信仰から外れさせようとする力に、私たちはさらされています。それに勝つには、私たちに代わって誘惑を退け、ご自分が神の御子であることを示してくださったイエスに信頼し、従う他ありません。イエスが神のしもべとなって、神の言葉によって父なる神に従われたように、私たちも、聖書の言葉によって、イエスに従っていきたいと思います。

### (祈り)

主なる神さま。私たちはあなたの口から出るひとつひとつの言葉によって生かされ、それによって知恵を与えられ、日々の生活を導かれています。また、あなたの御言葉は、試練のときの力、落胆の中での希望、誘惑からの救いです。ところが、私たちは、そのような時に御言葉を忘れてしまいがちです。私たちを深く教え、試練や落胆、また、誘惑の時に、御言葉を思い起こし、御言葉に信頼し、心から御言葉に従う者としてください。イエス・キリストのお名前です。

## 福音と日本文化 ⑦ 一あとがきにかえて

「キリスト教禁教」の高札が1873（明治6）年まで立てられていた日本の国にキリスト者が起こされ、教会が建てられたのは、じつに神がなされた奇蹟ともいえる出来事でした。教会は順調に成長し、福沢諭吉などは、日本も西欧諸国にならってキリスト教を国教にしたらとさえ言ったほどでした。しかし、天皇を「現人神」（あらひとがみ）として崇める国家主義の勢力は強く、1889（明治22）年、欧化主義者であった文部大臣森有礼（もりありのり）が伊勢神宮に対して不敬を働いたという中傷によって暗殺されるなどの事件が起きました。

その翌年、1890（明治23）年、「教育勅語」が発布されましたが、当時、第一高等中学校で教えていた内村鑑三が、「教育勅語」に対して最敬礼をしなかったという理由で免職となりました。これを機に、反キリスト教陣営から、「キリスト教は日本の国情にそぐわない」というおおがかりなキャンペーンが行われ、それまで順調であった日本での宣教活動は停滞の時期を迎えました。

しかし、1901年のペンテコステに東京のいくつかの教会で起こった「リバイバル」（信仰復興）によって、教会は再び力を得、1909年のプロテスタント日本宣教50周年大会などの全国規模の大集会が開かれ、20世紀の幕開けを飾りました。



**Penguin Club**  
[www.penguinclub.net](http://www.penguinclub.net)